

第6章 フゴッペ洞窟

岩谷 楓香

6.1 フゴッペ洞窟の概要

フゴッペ洞窟とは、北海道余市郡余市町栄町の、海岸まで 200m の小さな丘陵にある岩陰遺跡。およそ 1500～2000 年前の縄文時代に属すると見られ、洞窟遺跡としての価値は高く、とくに壁面の各部分に多数の図像が彫りこまれているのは稀有の例であり、北方古代文化を知るうえで重要な資料となっている。洞窟は、間口約 4m、高さ約 5m、奥行き約 5m で、内壁のあちこちに、舟、魚、海獣、4 本足の動物と思われるもの、また、角や翼で仮装した人と考えられる絵などが

図 6-1 フゴッペ洞窟での集合写真



フゴッペ洞窟従業員撮影

200 点以上陰刻されている。ほかに列点などの図像もあり、呪術的な性質を持つものと推定されている。洞窟内には厚さ約 7m の遺物を含む地層があり、薄手式の土器、石器、骨角器等が出土している。この遺跡の第一発見者は、札幌から海水浴に来た中学生であったといわれる。郷土研究部に所属していた高校生の兄に知らせ、知られるところとなった。1951 年と 1953 年に正式な発掘調査が行われ、同年、国指定史跡となった。1972 年から壁面彫刻は、カプセル方式の施設によって保護・展示され、一般に公開されている。

北海道の地名はアイヌ語を語源として漢字で当て字が多いが、フゴッペはアイヌ語がさらに訛ったものではないかといわれている。

6.2 フゴッペ洞窟の線刻について

6.2.1 線刻の意味

洞窟の内部には全壁面に、大小の画像が所狭しと彫り込まれている。画像には種々のテーマがあるが、その代表的なものには、人物像、仮装人像、四足獣、海獣、魚、船、紡錘形、円点、図形などがあり、これらの刻画をここに数え上げると、その数は 609 にも達する（表 6-1 参照）。岩壁に画像を刻み込む方法は、石か、あるいは何か硬いもので磨くようにしてほりこんでいく「磨研手法」といわれるものである。大部分は影絵のようにあらわされているが、わずかに輪郭であらわしたものもある。

人物像、四足獣、舟などのように、原形がわかるものもあるが、円点、紡錘形、記号のようなものなど、一見無意味と思われる図形も多い。何を表そうとしたのかわからないものもある。

古代人が描こうとしたのは、モデルのかたちではなく、モデルによってひきおこされた自分自身の感情で、「象徴」なのである。したがって、一見無意味にみえる円点や紡錘形なども古代人の感情であり、何らかの意味の表象である。いいかえれば線も点も古代人の心性のこもるものであり、イメージの表現である。

表 6-1 岩壁彫刻のテーマ

		南壁			奥壁	北壁			計
		前	中	奥		奥	中	前	
人物像		5	2	5		4			16
仮装人像	有翼人	11	12	31	5	43	5		107
	有角人	15	16	13	4	22	7	1	78
	不明	20	2	2	8	1		1	34
舟			1	2		1			4
魚								1	1
海獣						1			1
四足獣				1		2			3
紡錘形			81			23	10		114
円点			17	104		29	10		160
図形		3	3	2		7		1	16
その他		30	2	10		13	19	1	75
計		84	136	170	17	146	51	5	609

出所：峰山（1983:81）

6.2.2 線刻の種類

上であげたように、線刻には様々な種類がある。刻画の主人公は人物像と仮装人像からなる。

仮装人像は、三つの系列に分けられる。第一は、翼を広げた鳥に仮装したもので、これを有翼人と呼ぶ。第二は、角と尻尾のある動物に仮装したもので、これを有角人と呼ぶ。第三は何に仮装したものかわからないが、人物を何かに表現した一群である。

6.2.2.1 有翼人について

フゴッペ刻画の主人公となっている人像の中で最も多いのは有翼人である。有翼人は飛ぶシャーマンともよばれている。これは全部で107体にもものぼり、そのうちの69%に当たる74体が南北両壁の奥部に集中している。とくに南北奥部の中断と下段の有翼人は、他の壁画のそれよりも、形が大きく、具体的に表現されていて、構図の主題となっているものもある。

翼をもつものは、神と人との仲介者、靈魂の導き手であるという信仰は、洋の東西を問わず、多くの民族の間で広まっている。したがって、靈魂を鳥の形であらわした画像の例は多い。中でも空高く舞い上がるワシと、水中にもぐるカイツブリは、天井と地下の使者として重くみられ、シャーマンその者がワシの分身であるとさえ考えられていた場合もあった。

アイヌ神話にも翼のあるものが多く登場している。中でもシマフクロウはコタン（部落）の守護神としてまつられ、コタンカムイ（村を守る神）や、ニヤンコロカムイ（木の精霊をもつ神）といわれ尊ばれている。したがって、有翼人は様々な神話に登場してくるため、人像の中で最も多いのではないかと考えられている。

図 6-2 有翼人



出所：日本先史岩壁研究会

6.2.2.2 有角人について

有角人とみられる像は全部で78体そのうちの半分は南北両壁に集中している。とくに北壁奥部の上段から中段の上部にかけては、画像の彫りが深く、かたちも大きい。その上密度も高い。

北壁奥部の上段は岩質が硬く、おおいに張るように張り出している。洞窟人がこの場所を選んで多くの有角人を描いていたのは、彼らを感じとっていた有角人イメージに最もふさわしい場所であったからに違いない。このことから、有翼人と有角人はシャーマンとしてのはたらきや性格が異なっていたと考えられる。

図 6-3 有角人



出所：Footprint

両手両足を左右に開き、角の先端は両側に折れ曲がり、動物の毛皮を身にまとっているようにひだや尻尾があらわされていて、両手にシャーマンが儀式に使うような祭具を持っている有角人がある。これは仮装人像のなかで最も大きい。また、これは男性のシンボルであるといわれている。

輪郭だけであらわされており、右手に P 字形のものを持った有角人がある。これはおそらくシャーマンが楽器を持っている様子を表している。輪郭は磨研手法で深くかつ丹念に彫り込まれており、影絵様の画像とは違った威厳をそなえている。これは輪郭象の代表的な作品である。

有角人が動物の仮装をしているのは、狩猟をするときに動物の毛皮を着ていたほうが動物に怪しまれずに接近できるからである。一方、動物の中に人間あるいは神を感じ取っていたからではないかという説もある。

6.3 手宮洞窟と世界の洞窟

6.3.1 手宮洞窟

小樽市の手宮洞窟は、今からおよそ 130 年以上前、まだ北海道が「蝦夷地」（えぞち）と呼ばれていた頃の 1866 年に、神奈川県小田原市から朝里地区のニシン番屋建設のため出稼ぎに来ていた石工の長兵衛という人物が発見した。長兵衛は倉庫などを建てるための石を切り出している時、偶然この洞窟を見つけ、洞窟の壁にさまざまな彫刻が刻まれていることを地元の人々に伝えた。

その後、この彫刻はさまざまな人々によって広く世の中に知られるようになる。1881 年に榎本武揚が学会に紹介したという説もあるが、小樽市の資料によると、1878 年頃、開拓使（今の北海道庁）やジョン・ミルン（英国人：地震・地質学者）によって彫刻壁画（以下壁画）の模写が発表されると、考古学界、人類学界の著名な学者達がこの地を訪れ、壁画の持つ意味について研究が行われるようになった」となっている。実際、ミルンによって始めて学術的な観察と発表が行われたようである。その後手宮洞窟は前面の岩が削り取られ、また洞窟の上に鉄道が敷設されたりしたため、当初の姿を徐々に失っていった。

明治の中頃には雨よけの塀がかけられたり保存事業も行われ、1921 年には国指定の史跡

図 6-4 手宮洞窟



出所：秘境 100 選 Ver II

になった。発見以来 120 年以上経ち、風化、剥落の進行を防止し、貴重な文化財である手宮洞窟を後世に伝えるために、1986 年から保存修理事業が開始され、約 10 年の歳月を要し、1995 年に手宮洞窟陰刻面を全面保存する「手宮洞窟保存館」が完成した。

6.3.2 ディアマンティナ洞窟（ブラジル）

この洞窟はシャパーダ・ディアマンティナ国立公園にある。シャパーダとは「高原」、ディアマンティナは、「ダイヤモンドのように輝く」という意味である。数 km にもわたる長い洞窟の中には青の洞窟がある。青の洞窟はシュノーケリングスポットとして人気である。まるで体が浮いているように見えるくらいに水が透明である。青の洞窟は青色だけでなく、エメラルドグリーンにも染まる。とても自然が作り上げたとは思えない天井までそびえたつ大きな岩は圧巻であり、絶景ポイントである。

図 6-5 ディアマンティナ洞窟



出所：旅の大辞典

6.3.3 ワイトモ洞窟（ニュージーランド）

ワイトモ洞窟はニュージーランド北島ワイカト地方のテ・クイティにある鍾乳洞である。「ワイトモ」という言葉は、マオリ語で水を意味する「ワイ」と石灰洞窟や陥落孔の「トモ」に由来し、地下水に流れ続ける洞窟を表している。洞窟は、約 3400 万年前から約 2300 万年前の漸新世の石灰岩で形成されている。

ワイトモ洞窟には、土ボタルが生息していて、洞窟の天井一面に満天の星空のような輝きを見せることで有名である。ワイトモ洞窟は、別名「土ボタル洞窟」とも呼ばれており、無数に土ボタルが生息している。ここでは洞窟探検家を気取って鍾乳石の壁を上るという貴重な経験ができる。

図 6-6 ワイトモ洞窟



出所：NAVER まとめ

6.3.4 ソンドン洞窟（ベトナム）

ソンドン洞窟はベトナム中部に位置する世界遺産「フォンニャ・ケバン国立公園」の中にあり、全長 7m 高さは最大 240m (50 階建てのビルくらい) で世界最大の洞窟である。また、多くの生物も発見されており、地元住民の伝説とともにその全貌は神秘のベールで包まれているという謎多きスポットである。

洞窟内にはジャングルがあり、「エダムの園」といわれている。そこの付近で大量に見つかった、ケーブパールとも呼ばれる洞窟の真珠がある。これは洞窟の天井から落ちる水滴に含まれる炭酸カルシウムが小さい石に付着し、長い年月をかけて作られる。

図 6-7 ソンドン洞窟



出所：NAVER まとめ

6.3.5 ラスコ洞窟（フランス）

ラスコー洞窟には 600 ほどの壁画が残されており、世界最高の旧石器時代後期にクロマニヨン人の壁画群である。この洞窟の方解石でできた壁面には牛などの動物を描写してある。ラスコーの壁画がとくに有名なヴェゼール溪谷からモンティニャックにかけてつづく遺跡群は、「ヴェゼール溪谷の先史的景観と装飾洞窟群」として 1979 年に世界遺産登録された。オリジナルの洞窟、ラスコーは岩に描かれた絵を保護するため 1963 年に閉鎖され、一般には公開さ

図 6-7 ラスコー洞窟の壁画



出所：フランス観光公式 HP

れていないが、その代わりとしてオリジナルそっくりにつくったラスコーの全長は、実に 250m もある。紀元前 15000 年に描かれた人や動物像を見て、子供も歴史愛好家も驚嘆の声を上げ、洞窟の魅力の虜となることだろう。雄牛やバイソンや今はもう絶滅した動物たちで飾られた洞窟の独特の雰囲気に入れることができる。

6.3.6 トンカラリン（熊本県）

熊本県菊水町にある「トンカラリン」と呼ばれる古代の遺跡は、地中にできた暗渠（あんきょ）や地割れによる縦穴の上部を葺石で塞いでできた、全長 464.6mの随道（トンネル）型の遺構である。

「トンカラリン」の名前の由来は、穴に石を投げ込むと「とんからりん」という音が聞こえることからつけられたという説がある。

誰が、いつ、いったい何の為に建設したのか、いまだ不明だということ。排水路説、古代信仰遺跡説、朝鮮的信仰遺跡説あるが全ては仮説にすぎない。

図 6-8 トンカラリン



出所：NAVER まとめ

6.3.7 熊山遺跡（岡山県）

この熊山遺跡は露出した岩盤上に基礎を平らにするための基壇を築き、その上に一辺約 7.9m、高さ約 3.4m の方形三段の石積みをも階段状に重ねた石積遺構である。二段目（中段）の四方の面には龕と呼ばれる神仏を祀るための祠のような場所が設けられている。また、石積の中央部は空洞で、高さ約 2m の竪穴が作られていて、竪穴の内部には陶製筒形容器、三彩小壺、皮のようなものに文字が書かれた巻物の類が収められていたと言われている。この遺跡は奈良時代に作られたものであると言われている。

また、これほどの巨大な遺跡を誰が何のためにどのように作ったのかは不明。仏教の戒壇、仏塔、豪族の墓、修験道の遺構など諸説あるものの決定的となる説はまだ出ていない。

図 6-9 熊山洞窟



出所：日本の珍スポット 100 景

参考文献・参照 HP

・ 峰山巖, 1983, 『謎の刻画フゴッペ洞窟』 六興出版.

・ 旅の大辞典

<http://www.tabinodaiziten.com/>

・ 地球ことば村

http://www.chikyukotobamura.org/muse/wr_column_4.html

・ 日本先史岩壁研究会

<http://rupestrian.exblog.jp/>

・ 日本の珍スポット 100 景

<http://bqspot.com/chugoku/okayama/383>

・ 秘境 100 選 Ver II

http://hikyousakura.ne.jp/v2/2006/12/post_36.html

・ Footprint

<http://footprint.life.coocan.jp/Hokkaido3.html>

・ NAVER まとめ

<https://matome.naver.jp/odai/2146076943731523401>